

共感する 場を創る

WORK SHOP REPORT 2022

令和4年度

舞台芸術活用青少年支援事業 報告書

はじめに

神奈川県立青少年センターの機能を生かした本事業の実施は、コロナ禍により、令和3年度は断念せざるを得ませんでした。令和4年度はコロナ禍にあって、万全の感染症対策を講じながら、ようやく再開することができました。

ホール運営課と青少年サポート課では、不登校やひきこもりを経験した人たちに向けて、3回のワークショップを実施しました。演劇的な手法を活用し、「想い」を言葉で相手に届け、自身の意識変化を促すことを期待したプログラムです。参加者は「自分と他者とは違い、簡単には分かり合えないけれど、それでいいよね」という感覚をあらためて認識し、それを共有することで、コミュニケーションの力へと変換させるプロセスを体感しました。

指導者育成課では引き続き演劇的手法のインプロを体験し、考え方を学ぶ「インプロワークショップ」と、前回好評であった「場づくり」をテーマにした『「場づくり」を作る大切さを実感し心構えを学ぶ「場づくりに生かす!インプロワークショップ」』を実施しました。参加者はそれぞれのワークショップを通して、「コミュニケーション力をつける一番の方法はコミュニケーションを楽しむこと」、また、「場づくり」では、「遊ぶ時間が大切である」などの仕掛けを実感したことと思います。それぞれの現場でこれらの体験を通して得たスキルが役立つことを期待しています。

ウイズコロナという今までにない時代の中で、これらの企画にご尽力いただきました皆さま、ご参加いただきました皆さまに心から感謝申し上げます。この報告書が、文化施設で活動する人たちや職員の皆さまにとって、様々な場でワークショップを企画する際の手掛りとなれば幸いです。

神奈川県国際文化観光局
舞台芸術担当部長 兼
神奈川県立青少年センター参事
楫屋 一之

目次

はじめに	p1
目次	p2
事業概要	p3
派遣アーティストプロフィール	p6

REPORTS

Report1 舞台芸術活用ワークショップ	p8
Report2 インプロワークショップ	p15
Report3 場づくりに生かす！インプロワークショップ	p20

事業概要

演劇活用青少年事業は「舞台芸術活用ワークショップ等青少年支援事業」と「演劇手法ビルトイン事業」から成り立つ。

1 舞台芸術活用ワークショップ等青少年支援事業

(1) 趣旨

不登校、ひきこもりや、その他環境上の理由により社会生活への適応が困難になった子どもたち等、青少年の課題への対応策として「演劇」という表現方法に参加することで、自身の自己決定能力やコミュニケーション能力の向上を図る。

更には、参加者相互の信頼関係の醸成を通して、グループ内でお互いの個性を尊重しながら、実社会での生活や就学・就業等の諸課題に主体的に取り組む姿勢を生むきっかけ作りとする。

(2) 対象団体

- ・神奈川県に所在し、県内を活動拠点とする当事者、家族又は支援者で構成されている団体
- ・営利を目的としない団体であり、政治・宗教活動が事業の内容に含まれない団体
- ・県立・私立問わず、就学・社会適応が困難になった子どもの在籍する学校

(3) 事業内容

舞台芸術の表現者（演出家・ダンサー等舞台表現を中心としたアーティスト）を各施設・学校等に派遣し、舞台芸術の手法を使ったワークショップを実施する。

プログラムの実施日数・時間・実施内容等は派遣先の施設側と打ち合わせを行い、ニーズを顕在化させた上で決定していく。

(4) 支援措置

ア 本事業において負担する経費

派遣アーティストにかかる下見・プログラム実施にかかる回数分までの経費（謝金、交通費等）は本事業予算にて負担する。

また、アシスタントについての経費も同様とする。

会場使用料、機材使用料、消耗品等も本事業予算にて負担する。

イ 参加施設が負担する経費

特になし。

ウ その他

派遣アーティストの指定はできないが、ニーズに沿ったプログラムを実施できるアーティストを選定し、派遣する。

(5) プログラムについて

派遣アーティストが県内の施設でワークショップを行うことで、それぞれの子どもたちが抱える課題について取り組み・改善するための一助とする。

(例) 演劇の手法を使った施設・学校でのアウトリーチ、ダンス等の身体表現を使ったアウトリーチ、各施設職員を対象としたインリーチ等

多くの青少年、青少年に関わる人たちが施設独自の様々なプログラムを自由に企画することが可能となっている。

(6) 事業の流れ

事業参画団体及び施設との打合せ → アーティスト派遣 → 事業実施 → 報告書作成

2 演劇手法ビルトイン事業

(1) 趣旨

県立青少年センター指導者育成課では、地域で子どもや若者にかかわる、おもに成人の指導者を対象に、各種の研修講座を企画し実施している。

内容は、子ども若者同士の人間関係づくりをサポートする方法や、子ども若者と指導者との関係づくりの手法、レクリエーションのアクティビティ、自然体験活動の指導法、キャンプでの安全管理など多岐にわたるが、どのような内容であっても、子ども若者の主体的な参加を促すための支援方法という観点を大切にしてきた。

そうした観点から、「演劇」という表現方法を参考に、子ども若者の自己決定能力やコミュニケーション能力の向上を促し、彼ら自身の関係づくりをサポートし、安心して参加す

ることのできる場をつくるといったスキルを指導者に習得してもらうために、この事業を企画した。

(2) 対象者

放課後児童クラブ、児童館等の子ども施設職員
青少年に関わる行政職員

(3) 事業内容

演劇的手法を活用して、子ども若者を対象にした事業を実践している専門家を派遣アーティストに、プログラムを体験しつつその指導法について学ぶ、実習形式の講座とする。

(4) 事業の流れ

事業参画団体及び施設との打合せ → アーティスト派遣 → 事業実施 → 報告書作成

派遣アーティストプロフィール



photo by 稲川悟史

河井 朗 (かわい ほがら)

演出家・ルサンチカ主宰

大阪市出身。ルサンチカ（ressenchka）という舞台作品を作るカンパニーを主宰し、人を人たらしめているものは何かを問うために、戯曲を使ったり、人に話を聞いて構成した作品を上演する。ここ数年は継続的に「理想の死に方」や「あの日について」等を人々にインタビューしている。東京、横浜、京都を主な場所として活動する。



池上 奈生美 (いけがみ なおみ)

株式会社インプロジャパン代表取締役社長

1994年、役者として活躍している中でインプロと出会い、1998年以來毎年渡米し、成人教育や企業研修、劇団等の現場で、インプロ・スキル・トレーナーとしてトレーニングの指導を行っている。パフォーマーとしても「NeXT IMPRO THEATER」にレギュラー出演するなど精力的に活動し、海外でも数々の賞を受賞している。2001年にはインプロの普及を目的にインプロジャパンを設立。ワークショップの監修・指導や、インプロシアターのプロデュース・出演、テレビ番組の監修など、インプロに関わる幅広い業務を行っている。著書に『インプロ・シンキング』（ダイヤモンド社）、『インプロであなたも「本番に強い人」になれる』（フォレスト出版）がある。



鈴木 聡之（すずき さとし）第3回、第6回
インプロパーク主宰・インプロヴァイザー

学生時代はキャンプリーダーとして子どもたちの野外活動に携わり、大学卒業後21年間小学校教員として勤務。総合学習の計画を進める中でインプロに出会い、そこから4年間、小学校でインプロを活かした「演劇」の授業を実践。その後小学校教諭を退職し、自分自身でワークショップを開くようになる。全国で「出前ワークショップ屋」としてインプロを活かしたワークショップや授業を展開。インプロを活かした「場」を作る日々を過ごす。また、インプロヴァイザーとして、パフォーマンスライブ（即興芝居）のステージにも立つ。2022年度は、武蔵野学院大学・有明教育芸術短期大学・千葉黎明高校で非常勤講師を務め、各地の小学校4校へも外部講師としてインプロ授業に出かけている。

Report 1

舞台芸術活用ワークショップ

1. 概要

会場・日程

会場：青少年センター（研修室1）

期日：第1回 令和4年10月28日（金）

第2回 令和4年11月10日（木）

第3回 令和4年12月2日（金）

事業の背景及び趣旨

ひきこもり・不登校等社会生活を円滑に営む上で
の困難を有する子ども達を対象に、舞台芸術の表現
方法を活用したワークショップを実施することで、
コミュニケーション能力の向上を図る。

参加人数

第1回 14名

第2回 7名

第3回 8名

※参加者については別紙「チラシ」の通り

担当者の開催意図

不登校やひきこもりを経験した「生きづらさ」を感じ
ている人たちにとって、自分の想いや経験を言葉
で表現する機会は多くないと感じている。また、表現
することに苦手意識があり他人とコミュニケーションを
とることに困難を感じている人も多いのではないだ
ろうか。

舞台芸術の手法を活用して自分の想いを言葉で相
手に届ける体験をすることで、自身の意識に変化が
起きることを期待して実施した。

また、このワークショップは他に例をみない取り
組みであることから、来年度以降は市町村に広げて
この取り組みを実施したいと考え、市町村担当者にも
参加を呼び掛けた。

派遣アーティスト

アーティスト

…河井 朗（演出家・ルサンチカ主宰）

アシスタント

…蒼乃 まを（俳優、青年団所属）

永井 茉梨奈（俳優、新国立劇場研修所卒）

2. ワークショップ内容

ワークショップ企画のポイント

今回のワークショップについては、すべての回に参加
をする人と、いずれかの回のみ参加となる人が
いることから、「どの回に参加をしても戸惑いや気お
くれを感じることなく楽しめる内容にしたい」こと
を派遣アーティストと打ち合わせた。

ワークショップの流れ

○導入

○ワークショップ開始

「あの日」を描く

「あの日」を想像して話す

グループワーク

発表

○振り返り

ワークショップの詳細

このワークショップは、参加者自身の「あの日」について絵を描くことから始まる。「あの日」は参加者の過去の体験、記憶、印象に残っている物、記号、何でも良い。

その絵を好きな場所に貼り、展覧会風に見学をした後、それぞれが印象に残った絵を選び、あたかも自分が描いた絵のように「あの日」について説明をする。この時はその絵が表した「あの日」の内容は本当の作者しか知らないが、講師によってその場が展覧会会場の雰囲気になり、講師が説明をしている人に対して本当の作者のように質問をするなど言葉でやりとりをしているためか、参加者の誰もが自分が本当の作者になったかのようによどみなく想像の話をしていた。

第3回目のワークショップでは「あの日」を描いてから2人1組でインタビューを行い、相手の話をもとに聞き手も相手の「あの日」を想像して描くといった内容も加わった。

ワークショップ後半は参加者を2グループに分けて話し合いを行い、絵から想像した物語を作り、各グループごとに全員で表現した。

3.アーティストレポート

舞台芸術の手法を使って、参加者がコミュニケーションについての新たな発見が生まれればと思いワークショップを行った。いわゆる「ワークショップ」にありがちな、課題と目的を達成するのではなく、普段私が使っている制作を行う上での「ツール」を伝えそれを知ってもらうことを一つの目標とした。私は何らかの公的な講師資格等を保持しているわけではないので、あくまで演劇と一緒に作るならということから考えをスタートさせることとした。そこに参加者の方の特性や時間の制限などを組み込んで今

ワークショップの流れ



【導入】

自己紹介、本日やることの説明など。参加者の自己紹介は講師からの「今日は何をしにきましたか」「今年やり残したことは何ですか」といった質問に答える形で行われた。



【「あの日」を描く】

参加者それぞれが思い描く「あの日」で印象に残っていること・物・風景などを描く。色をたくさん使う参加者もいれば単色で描く人もいた。



【「あの日」を想像して話す】

自分が気になった絵を選び、絵から想像した「あの日」を自分が作者であるかのように話す。講師がその絵について質問をするが、参加者はさらに想像を膨らませて答えていく。

回のワークショップを作っていた。

対象者は神奈川県内在住の be フレンドの方々、ひきこもりの当事者やそのご家族などであった。be フレンドの方々には普段から人前で自分の話をする機会があつたりするとのことで、主催者の意向もあり、自身の経験を発話するだけで止まらない機会を創出するのが望ましいと考えた。

今回のワークショップのメインとした課題は、これまでの私の演劇制作方法に使用したちょっとした遊びを発展させたものである。私は普段から協働者（主に出演者やスタッフの方々）と話をするところから制作を行っており、その時に相手を知るきっかけとして利用している方法を応用した。

まず、参加者の皆さんに紙とペンをお渡しし「あの日」を描いてもらうように伝える。「あの日」というのはどんな日でも良く、楽しい思い出の日でも悲しい思いをした日でも、はたまたこうだったら良いなあという願望の日でも良い。文字情報は無し。その後、それを部屋の中に好きに飾ってもらい、参加者全員で鑑賞し合う。その時に気に入った絵を一枚選んでもらい、鑑賞後にその絵の作者として「あの日」の絵の解説を行ってもらう。これが今回のワークショップの一連の流れだ。

大人になると絵を描くという行為から遠ざかっている人も多いだろう。しかし、「本当のことを 100% 描かなくて良い」という前提があると、その場に本当はないものでも、描けるから描き足したりその逆も起こりうる。情景を描こうとすると、思い浮かべた景色を描こうとする人が多いが、幾何学模様だけを用いて巧みに表現した参加者の方もいらっしまった。絵を描くというステップに嫌悪感がある人もいるのではないかと危惧していたが皆さん柔軟に対応してくださったことが有り難かった。

絵を飾るステップでは、あまり上手ではないからという理由で机の裏に隠すように貼ったり、絵の内



【グループワーク】

2つのグループに分かれて、講師と一緒に絵から想像した物語を作る。



【発表】

絵から想像した物語を各グループごとに全員で演じる。

振り返り

容とリンクさせて半分だけ見えるようにだったり、床に置かれている絵もあった。もっと事務的にただ絵を配置するようになると想像していたので、ここにも個性が出てくることが判明し、こちらとしても展示方法の発展が見込める場所を提示すべきだったと勉強になった。

その次が今回のメインと言っても過言ではない、作者として語る（騙る）ステップである。本当の作者は誰なのか全くわからない状態で、嘘の「あの日」を話すことになる。発話者のルールは誰かのことを貶めたりしないことだけ。このタイミングで、結果としてほとんどの参加者が、自分の実体験を織り交ぜながら話すことになった。これが演劇のいわゆる役作りといわれているものと似通っている大事な点だと考えている。この人が何を見て何を話すのか。それは自分とはどれくらい異なっていて、どれくらい同じなのか。そういう日常生活でも当たり前に使わなければならない類の想像力を働かせて参加してくれた方が多かったように感じた。

ここまでの行程だけを予定していたのだが、初回時にスムーズに進行ができたためにもう少しタスクを足しても良いと感じて、残りの2回の実施では語り（騙り）のステップの後に、その絵を元に現実に起こしてみるステップを追加した。これは参加者が想像していた演劇のワークショップに近いものとなったようであった。このステップでは、参加者を5~6名のチームに分けて話し合っただけという発表をするのかを決めてもらった。絵の正解の「あの日」は作者から明かされない状態で想像を膨らましていく。そうして、自分ができそうな、やりたい役を探して、全員でどこまで起こしていくかを相談する。この時、たくさんのアイデアは提出されるが、それを取捨選択していく難しさを実感した。全員のやりたいことを完全に叶えることは難しい。その兼ね合いについてをほぐしていくのは、もう少し長期的なプログラ

ムが必要だろうと思う。参加者の中には演劇はもちろん、美術館や映画館などの文化施設に行ったことがないという人も数名いたため、参加者と共にいろいろなところに行き、実際にあるものを見てから、アウトプットする機会を設けることができれば参加者もいろいろな想像を膨らませやすかったかもしれない。

以上が今回のワークショップの全容である。

本実施ではなるべく、自身の考えたものを他人が介すことでどう変化してしまうのかや、他人とコミュニケーションを行いひとつのものを作るなどをプログラムに組み込み、自分と他人が分かり合えることは少ないということを実感してもらうワークショップとなった。そもそも私は分かり合えることができれば物語も、諍いも、自身の生活に影響を与えるネガティブな感情は生まれないと思っている。他者と他者が簡単に理解し合い、手を取り合えるわけがないのだ。だからこそフィクションの力を借りて、演劇という形でコミュニケーションを行う機会を作っている。今回の「語る（騙る）」という姿勢が、参加者にとって分かり合えないことから、分かりあえないことをお互いに共有するという新しい力と発展になれば幸いである。

4. 担当者の振り返り・次年度に向けて

今回のワークショップの参加者は、一般募集で申し込みのあった方、be フレンド、市町村等関係者と様々であり、参加する目的は皆違っていた。参加の目的は違うものの、「自分の伝えたいことは相手にどう受け取られるのか」ということを体験したこのワークショップは、結果的に参加者皆が気づくことがあったように感じる。

それは講師が常に皆に投げかけていた「自分と他

人は分かりあえない」という言葉、つまり自分と他人は分かり合えなくて当然、すれ違うものだ、という考え方が基本にあり、それをワークショップを通して体験できたからではないかと感じている。人とは分かり合えないのが当たり前、だから人のことを気にせず自分の思ったとおりに参加者は表現でき、そして皆に受け入れられる体験を通して「自分と人は違うのだから分かり合えないよね、だけどそれが当たり前、だからそれでいいんだよ」ということを感覚として感じ取れたのではないだろうか。

次年度以降は市町村関係の活動場所に場を移し、この取組を広げていけたら良いと思っている。

5. 参加者の気づき・感想

・他人の気持を他の人に共有する緊張感と思いやりの経験は、今後も思い出さだろうなと思っています。初めて会う方とも何にも違和感なく話せている自分におどろいています（舞台芸術すごい？）楽しかったです！

・はじめはなかなか気持ちが入りきれなかったが、すぐにどんどん入って行きました。分かりあえない、伝えきれない人どうしてどうやって少しでも伝えられるかなど感じていました。

・ひじょうにのびのびと自分の思ったことを表現できました。許されている感覚、何を言ってもいい感覚楽しかったです。相手の思いを仮で考える 違いを理解する 練習になったかな？と思いました。

ワークショップ参加募集チラシ・表面



令和4年度 舞台芸術活用ワークショップ等青少年事業

2022 舞台芸術活用 ワークショップ 参加者募集!!

あなた自身の言葉、届けるために
生きづらさを感じているあなたに…
舞台芸術の表現方法を活用したワークショップを開催します。



11/10 (木)
13:30～16:30
神奈川県立青少年センター
3階 練習室
申し込み締め切り：11月3日(木)

12/2 (金)
13:30～16:30
神奈川県立青少年センター
3階 研修室1
申し込み締め切り：11月25日(金)

※両日申し込むこともできます

ワークショップ参加募集チラシ・裏面

募集内容

対象者:15歳以上の不登校・ひきこもり当事者、
元当事者の方
定員:各回20名
(応募者多数の場合は抽選となります)
料金:無料

申込方法

- ① ご希望の日(どちらか、または両日)
- ② 氏名
- ③ 年齢
- ④ 電話番号
- ⑤ 所属(所属団体、〇〇市居場所活用等、
所属がない場合は記入不要)

① ~ ⑤をご回答の上、
神奈川県立青少年センター青少年サポート課
へメールで申し込みください。

※結果については
青少年サポート課から
ご連絡いたします



nposupport.440@pref.kanagawa.lg.jp
メールが難しい場合は、電話で受け付けます。

045-263-4467 (月曜休)

講師プロフィール

河井 朗(かわい ぽがら)

演出家。大阪出身。ルサンチカという舞台作品
を作るカンパニーを主宰。
戯曲を作ったり人に話を聞いたりして作品を
上演している。
ここ数年は、「理想の死に方」や「あの日」につ
いて、継続的に色々な人にインタビューしてい
る。

永井 菜梨奈(ながい まりな)

俳優。高山県出身。
新国立劇場演劇研修12期終了。
大学在学時には、渡邊守章氏のもとフランス
演劇の研究・上演に携わる。
また、日本舞踊やふるさとのおわら節りなど、
地域に根ざした踊りと身体について楽しく学
んでいる。

蒼乃 まき(あおの まき)

俳優。千葉県出身。大学で日本文学専攻。
青年団に所属して活動。
休みの日は、博物館や美術館に行って観を演
じている。
まだ、将来やりたいことが決まっていない、で
も、何でもできる人になりたいので何でもやっ
てみようと思っている。



お問合せ先
神奈川県立
青少年センター
青少年サポート課
永津
045-263-4467

Report 2

インプロワークショップ

1.概要

会場・日程

会場：神奈川県立青少年センター

日程：令和4年8月4日（木）

事業の背景及び趣旨

「体験学習プログラムセミナー」では、地域で子どもや青少年とかかわる支援・指導者や教員を対象に、体験学習の手法を使ったさまざまなプログラムの指導法や展開法を紹介するために、毎年数本の研修を実施している。

今年度は、アイスブレイキングやグループワークなどをテーマとした4講座計7回のセミナーを企画した。その中で演劇的手法のインプロを体験し、その考え方を学ぶ機会として、インプロワークショップを設定した。

参加人数

支援・指導者、教員、学生等 18名

担当者の開催意図

インプロのアクティビティは遊びの感覚で取り組めるものが多く、日常生活とリンクしやすい。インプロには自己の役割認識や変化への対応力など、自己理解や他者とかかわり方について学び考える要素が含まれているため、コミュニケーション能力の向上に適した活動であると考えて企画した。

また、体験型の研修の場合、アクティビティを覚えることを目的に参加する方もいるが、何よりもまずは楽しんでもらうことを最大のねらいとし、インプロに触れて感じたことや、インプロの考え方を日常のコミュニケーションの場面に生かしてもらうために企画した。

派遣アーティスト

アーティスト

…池上奈生美

(役者、インプロ・スキル・トレーナー、

株式会社インプロジャパン代表取締役社長)

アシスタント

…峰松佳代 (株式会社インプロジャパン)

2.プログラム内容

プログラム内容のポイント

インプロアクティビティの体験の中で、相手の意見を一度受け入れ、そこに自分の意見をプラスする「YES AND」の考え方を意識してもらおう。

また、ショートレクチャーを挟み、今後のコミュニケーションについてより深く考えるためのヒントを提供する。

時系列プログラム内容

9:30 受付開始、講師来所

10:00 オリエンテーション

10:10 アクティビティ体験、レクチャー

12:00 休憩

13:00 アクティビティ体験、レクチャー

15:50 チーム対抗インプロ

16:15 まとめとふりかえり

16:30 解散

プログラムの詳細

体験したアクティビティ…エア握手で自己紹介、共通点探し、発信と受信、ナイフとフォーク、ひらめきリレー、リズム DE 10、リズム DE しりとり、リズム DE 連想ゲーム、ONE WORD、YES AND、チャンスゲーム、サンキュータイトル、名作1分

アクティビティの合間に、インプロ・シンキング（インプロの考え方）のレクチャーと、アクティビティを体験して気づいたことを互いに話し合う時間が設けられ、聞く、話すを通して学ぶことができた。

最後に行ったチーム対抗インプロでは、4つのチームに分かれて、それまでに体験した「ONE WORD」や「ひらめきリレー」など4つのワークから2つを選び、チームで協力して発表を行った。

3.アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初のねらい

インプロ（即興劇）の手法を通じて、日々の現場で子どもたちの変化を感じ取る、受け入れる、共に想像するなど、現場に活かしていくヒントを見つけていただける体験型のプログラムを準備した。また、現在はコロナ禍のため、対面のコミュニケーションには制限があるが、参加者には、インプロを通じて、制限下でも人と関わる楽しさを感じていただき、子どもへの指導の場面での存在や佇まいによって、子どもたちに同様にその楽しさが伝わることを目的とした。

実際にプログラムを行っての結果

気づき・所感

コロナ禍でもあり、今までと違って、マスクあり、ディスタンス確保、少人数、など制限がある中での実施だった。それでも、まず人と直接出会い、協同しながら創作し、笑い合える場は、とても楽しそうであった。



▲エア握手で自己紹介



▲ナイフとフォーク



▲ひらめきリレー



▲ONE WORD



▲チャンスゲーム



▲チーム対抗インプロ

また、コロナ前までのインプロWSでは、「学ぶ」という目的意識が高い方が多かったが、今回はご参加者の中に、まず「楽しむ」という空気があり、今まで以上に弾け、自由に表現することを皆さんが求めているように思った。そのため、プログラムも途中から、当初予定していた内容を変更し、最後にチームごとに発表する時間をとった。チーム名を決めたり、即席の観客の前で演じたりすることで、より一体感が増し、時間を追うごとに自然と「YES AND」を発揮され、今日初めて出会った方々とは思えないほどのチームワークが生まれた。始まりと終わりの皆さんの変化を、強く感じられた1日だった。

次回、本プログラムへの展望

このような状況（コロナ禍）がいつまで続くかわからないが、アフターコロナの環境になってもコミュニケーションということは、大きな課題になっていくことが予想される。そんな中、楽しく体を動かし、お互いを受け入れながら「一緒にいる」幸せを実感できるワークを開催していきたい。また、マスクやディスタンスなどがあっても、それを「制限」と思わない場を創っていきたい。

4. 担当者の振り返り

次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

当課が実施している体験学習プログラムセミナーには、「指導の現場ですぐに使えるネタ集め」を目的として参加される方も多い。今回の研修では、即興演劇「インプロ」のワークを体験するが、その体験を通してコミュニケーション力の向上を図り、考えることを意図しているため、そうした参加者のニーズと研修の目的が合致するかという点が心配であった。

企画を実施した結果

冒頭で、講師から「コミュニケーション力をつける一番の方法は、コミュニケーションを楽しむこと。今日は、インプロのワークを覚えるよりも、まずは楽しんで参加してほしい。」と目的が明確に提示されたこともあり、当初の心配をよそに、参加者はみな楽しむことに集中していた。インプロのワークを通して肌で感じたコミュニケーションの良さを、日頃の生活や子どもたちへの指導の場面で役立ててもらいたい。

また、当課の研修では、参加者が「研修中に呼ばれたい名前」を名札に書き、研修中はその名前呼び合うことがある。今回も参加者には名札を書かせたが、研修の最後に、講師から「名札の裏面に今日の研修で感じたことを書いて、お持ち帰りください。」と指示があり、名札自体にも意味を残せる方法は、職員にとっても大きな学びとなった。

次回、本事業を行う上での改善点

この研修は、総合教育センターが実施する、教員の基本研修の講座としても位置づけられている。定員の半数近くを基本研修に割くため、必然的に参加者のうち教員の比率が高くなる。青少年行政や施設の職員にとっても有用な研修であるため、様々な職種の方が参加できるように、広報を工夫する必要がある。

5.本事業における結果報告

参加者の気づき・感想

●学生

初めてインプロを体験し、1日を通して様々な人や考え方に会えました。貴重な体験をありがとうございました。

●教員

インプロ・シンキングの考え方、体験を通じて学べて楽しかったです。

●教員

今年から教員になり、「研修」と聞いて身構えてしまっていたが、ニックネームで呼び合うことで、親しみを感じながら活動することができた。

●教員

「YES AND」の考え方が良かったです。肯定が全てではないことを学びました。今後に生かせると思いました。

●青少年支援者

楽しく参加できました。楽しむことの大切さにあらためて気づきました。



▲セミナー風景

ワークショップ参加募集チラシ・表面

コミュニケーションと関係づくりのためのワークショップ

体験学習プログラムセミナー



子ども・若者の仲間づくりや学級づくりのためのさまざまな手法とその考え方について、体験的に学ぶことのできる講座を企画しました。9月からの地域活動や教室で、ぜひご活用ください。

協カゲームやコミュニケーションゲームの体験研修

グループワークの活用法

A 7月28日(木) 10:00~16:30
B 8月20日(土) 10:00~16:30

※A、Bは同じ内容です。



コピーブロック

仲間づくりや雰囲気づくりのための体験研修

すぐに役立つアイスブレイキング

C 7月24日(日) 13:00~16:30 指導体験型①
D 8月3日(水) 13:00~16:30 指導体験型②
E 8月7日(日) 13:00~16:30 アクティビティ体験型

※C、Dの回は同じ内容で、参加者による指導体験を実施します。



セブンイレブンじゃんけん

即興劇の手法を使ってコミュニケーション能力

や表現力の向上を図る体験研修(即興劇を演じてもらうことはありません)

インプロワークショップ

F 8月4日(木) 10:00~16:30



インプロゲーム

主体的に活動していくための関わり方を実習で学ぶ体験研修

コミュニケーションワークショップ

G 7月30日(土) 9:30~13:00

ペアワーク
(コロナ禍前の研修会で)

【主催】神奈川県立青少年センター

【会場】E(8月7日(日))のみプロミティあつぎ

それ以外はいずれも県立青少年センター 3階 研修室1

【対象】地域で子どもや若者にかかわる活動をしている支援・指導者、教員、学生等

【定員】各回共に20名

【費用】無料

※お申込み方法は裏面をご覧ください。

※詳細の内容については、各二次元コードで検索してご確認ください。

Report 3

場づくりに生かす！インプロワークショップ

1.概要

会場・日程

第1回 会場：海老名市会場
日程：令和4年9月15日（木）

第2回 会場：鎌倉市会場
日程：令和4年11月15日（火）

事業の背景及び趣旨

学童クラブ・児童館等の子ども施設は地域に数多くあり、特に近年、学童クラブや放課後児童クラブなどの学童保育の施設は急増している。しかし指導員に対する研修の機会などがあまり多くは設定されておらず、現場で活用することのできるあそびやアクティビティを学びたいというニーズは高い。インプロをテーマとした研修事業は毎年好評であるため、今回は2年ぶりに企画した。できるだけ広域の対象者に機会を提供するために、県内2会場でほぼ同一の内容で実施した。

参加人数 合計51名

児童館職員：6名
放課後児童クラブ職員：43名
その他(行政職員等)：2名

第1回海老名市会場：34名

第2回鎌倉市会場：17名

担当者の開催意図

この事業では、日々子どもとの関わりに生かせるスキルを身につけてもらいたいという意図でさまざまな企画をしてきた。子ども施設の指導員にとって、あそびやものづくりなどアクティビティのレパートリーを増やすだけでなく、子どもにとって安心

できる居場所をつくるための温かな雰囲気づくりや人間関係を育てるスキルも必要である。そういった意図から過去に「場づくり」をテーマにインプロワークショップを実施したところ大変好評だったため、今年もさらに多くの方にインプロを知ってもらいたいと、同一のテーマで開催した。ゲームとしてアクティビティを現場に持ち帰るだけでなく、「誰もが『ここに居ていい』と思える場」を作るために大切なことや心構えについて、アクティビティを通して体験的に学ぶ機会とした。

ファシリテーター

アーティスト…鈴木 聡之（インプロパーク主宰）
アシスタント…戸草内 淳基、会原 実希
(インプロカンパニーPlatform)

2.プログラム内容

プログラム内容のポイント

実際にアクティビティを体験して、参加者自身が楽しみながら自己表現をできる場を作ること、インプロを生かした場づくりを実感してもらいつつ、場づくりで大切にしたいキーワードについて参加者へ伝えた。またアクティビティを現場で実施する際の注意点や声掛けのポイント等についても、講師の体験談を交えながら適宜レクチャーしてもらった。

時系列プログラム内容

9:30 受付開始、講師来所
10:00 オリエンテーション
10:10 アクティビティ体験
12:50 諸連絡
13:00 解散

プログラムの詳細

●アクティビティ体験

「グーチョキパーアンケート」「スケールライン」「ネームサークル」「ネームコール」「妄想ごっこ」「ゾンビゲーム」「タケノコニョッキ」「アジャジャオジャジャ」「アイムゲーム」「ワンワードストーリー」

●アシスタント2名による即興劇の実演

●リフレクションタイム

3.アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初のねらい

2年ぶりの開催だったが、前回までの経験を踏まえ、プログラムを一部変更した。「リアルな自己紹介の部分を減らし、フィクションの世界で遊ぶ時間を増やしたこと」「言葉で表現するプログラムを減らし、身体表現で遊ぶプログラムを増やしたこと」が主な変更点である。セミナー全体としては、これまで同様に「即興表現（インプロ）を思い切り楽しむ体験の中から、子どもたちとの『場づくり』に生かす『気づき』を得てほしい」という願いをこめて、プログラムを構成していった。子どもたちひとりひとりが「誰もが『ここにいていい』と思える」場づくりをしていくための「様々な仕掛け」を、実際に参加者の皆さんに投げかけながら、様々な即興表現へのチャレンジを進めていくようにした。

実際にプログラムを行っての結果

気づき・所感

プログラム冒頭、早目に「フィクション」の時間に切り替えたことで、参加者の皆さんが「遊び」の世界によりスムーズに入れたのではないだろうか。新たに加えた少人数の身体表現プログラムも、皆さんに楽しんでいただけたようで何よりである。セミナーを繰り返



▲スケールライン



▲妄想ごっこ



▲タケノコニョッキ



▲アジャジャオジャジャ



▲即興劇の実演



▲リフレクションタイム

返し実施させていただいているおかげで、「思いっきり楽しむ時間」と「場づくりを考える時間」のバランスも、程良く取れてきたと感じている。

アシスタント（兼「実演者」）2名のための予算を取ってくださっていることも、大変ありがたい。今回も、参加者の皆さんのアイデアをもとにした、この日限りの即興劇を観ていただくことができ良かったと思う。

次回、本プログラムへの展望

ウィズコロナの時代だからこそ、子どもたちが、ここからからだを動かして思いっきり遊ぶ時間が大事だし、誰もが存在を丸ごと受け止めてもらえる空間づくりが重要だと考える。今後もより多くの方に、このプログラムに参加していただいて、共に遊び、「場づくり」を学んでいきたい。

4. 担当者の振り返り

次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

これまでインプロをテーマにした研修を実施した際、参加者のふりかえりアンケート等で「演劇をやるのかと思っていた」という声があったので、研修内容をより丁寧に説明するよう心がけてチラシを作成した。また、第1回の会場は初めて利用する会場だったため、事前の下見や物品の確認等を念入りに行った。

企画を実施した結果

一昨年度と同テーマで同じ講師に引き受けていただき、アシスタントの2名も一昨年度来ていただいた方々だったため、ワークショップ内容を把握した上で会場設定等を行うことができた。

最初は緊張していた参加者もインプロゲームを通

して表情がほぐれていき「どんな自分の表現も受け入れてもらえる」という安心感から新しい表現にチャレンジする力を得ていた。

講師には参加者同士の直接的な身体接触がないプログラムを組んでいただけたため、参加者も安心してワークショップに参加していた。

講師は小学生を対象としたインプロワークショップの経験も豊富なため、ゲームの合間に紹介される講師の経験談からも、実施時の注意点や声かけの工夫等現場で生かせる多くの学びがあった。ワークショップを通して「場づくり」の仕掛けを参加者に感じてもらえたと思うので、ぜひ現場で活かしてもらいたい。

次回、本事業を行う上での改善点

第1回の参加人数に比べ、第2回の参加人数が少なかった。ワークショップを行う上での支障はなかったが、できるだけ多くの人にインプロワークショップを体験してもらえるよう、実施時期や会場を工夫したい。

5.本事業における結果報告

参加者の気づき・感想

●放課後児童クラブ指導員

否定してもいい、断ってもいい。素の自分を出す。
リラックスできて素直に答えられました。ありがとうございました。

●児童館職員

改めて子ども達と向き合う時の姿勢を学ぶことができました。その子の表現を大切に一人一人と向き合い受け止めていき、より子ども達の安心できる場となれるように今後に生かしていきたい。

●放課後児童クラブ指導員

仕事を始めて2年目で、経験不足、スキル不足に悩んできた。多様な個性を否定することなく、一体感をもたせるのはどうすればいいのか日々考えながら過ごしていたので、今回の講習は本当にためになった。

●放課後児童クラブ指導員

普段子どもと関わっているときには「どうにか楽しんでもらおう、何か言ってもらおう」と頑張っていました。しかし、必ずしもそうするのではなく、「緊張を無理にほぐそうとしないこと、思いつかないという意見も受け入れること」などを学び、現場でも意識しようと思いました。そのような姿勢で接することでお互い楽に交流できると気づきました。



▲セミナー風景

ワークショップ参加募集チラシ・表面

令和4年度子ども施設指導員セミナー第6回

場づくりに生かす！



インプロワークショップ

インプロは「即興」という意味の英語“improvisation”を略した言葉で、芸術分野での「即興表現」全般を意味します。といっても、このセミナーで演劇をやるわけではありません。インプロのエッセンスが入ったゲームを楽しみながら、「誰もがここに居ていいと思える場づくり」について考えてみましょう。

【日時】 令和4年 **11月15日** (火) 10:00～13:00
(9:30受付開始)

【会場】 玉縄青少年会館（鎌倉市玉縄 1-2-1）

【持ち物】 筆記用具（ボールペン1本程度）、飲み物、動きやすい服装

【講師】 **鈴木 聡之氏**（インプロパーク主宰・インプロヴァイザー）
アシスタント 戸草内 淳基氏、会原 実希氏（インプロカンパニー Platform）

【対象・定員】 子ども施設（児童館等）及び類似施設の指導員 30名

【昼食】 昼食時間は設けておりません。昼食はセミナー終了後にお取りください。

【申込方法】 **各市町村主管課にお申し込みください。** 《各市町村によって締切日が異なります》

【主催】 神奈川県立青少年センター

【講師プロフィール】

昭和33年生まれ。学生時代はキャンプリーダーとして子どもたちの野外活動に携わり、大学卒業後21年間小学校教員として勤務。総合学習の計画を進める中でインプロに出会い、そこから4年間、小学校でインプロを活かした「演劇」の授業を实践。その後小学校教諭を退職し、武蔵野学院で大学と高校の教壇に立つようになる。武蔵野高校では5年間日本史を教え、武蔵野学院大学では現在も非常勤講師として「演劇表現論」「プレゼンテーション技術」を担当する。同時期に自身でもワークショップを開くようになり、全国で「出前ワークショップ屋」としてインプロを活かしたワークショップや授業を展開。インプロを活かした「場」を作る日々を過ごす。また、インプロヴァイザーとして、パフォーマンスライブ（即興芝居）のステージにも立つ。

共感する場を創る

令和4年度 舞台芸術活用青少年支援事業報告書

編集・発行 神奈川県立青少年センター

〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9番地の1

電話:045-263-4400(代表)

発行日 令和5年3月



神奈川県立青少年センター



神奈川県

県立青少年センター

〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘9番地の1

電話(045)263-4400